

コウノトリ湿地ネットニュースレター

パタパタ

vol.

33

豊岡市城崎町今津1362
0796-20-8560
toshima8560@iris.eonet.ne.jp
<http://wac-s.net>



2016年10月7日 久美浜湾河口 撮影 美王恵次郎氏

- 1_「日本コウノトリの会」が発足しました
- 3_コウノトリの健康管理
- 7_コウノトリ湿地ネットの活動に期待すること
- 8_巣塔観察
- 9_ハチゴロウの戸島湿地便り
- 11_お便り・編集後記

「日本コウノリの会」が発足しました

コウノリ湿地ネット 代表 佐竹 節夫



8月30日、コウノリの野生復帰を全国的な視点で考え、行動する会として「日本コウノリの会」が発足しました。発足時のメンバーは、豊岡、東播磨、京丹後、亀岡、越前、川越、鴻巣、和歌山、鳴門などの方です。どんな会なのか、その設立趣意書から抜粋して説明します。

2005年から兵庫県豊岡市で始まった飼育下個体の放鳥と野外繁殖により、コウノリが着実に仲間を増やし続けています。昨年からは千葉県野田市、福井県越前市、韓国イェサン郡で放鳥された個体がそれに加わって、今や100羽を超えるコウノリたちが北海道から沖縄、千葉から朝鮮半島と東西南北を幅広く飛び廻っています。

彼らが各地をダイナミックに飛ぶのは、一気に200km以上を飛ぶ飛翔力の強さを示すものであると同時に、現在の日本にはまだコウノリが生息でき得る良好な環境がほとんどないために、転々と安住の地を探し求めていることを表しています。早急に、コウノリが各地で定住できるよう、水辺環境の再生が求められます。



20161002 奄美大島に長期滞在中のJ0067 撮影 奥氏

一方、突然にコウノリが舞い降りてきた各地では、一様に暖かく迎えられているだけでなく、生態観察、自然環境の再生、環境創造型農業への転換などに進んでいるところもあります。たった1羽が舞い降りることで、その姿に魅せられた人たちによる小さな動きが始まり、周囲を巻き込み、やがて地域・農業をも変えようかというコウノリ。まさにコウノリは地域に希望と勇気を運んでくる鳥であり、困難な日本の環境再生に向けて無限の可能性を示してくれる鳥と言えます。

コウノリを積極的に迎えようとして、一定のムーブメントが各地で起こりつつあることを受け、本年6月、コウノリを愛する市民が豊岡に集い、日本・韓国におけるコウノリ飛来状況や市民活動の状況を報告し、語り合いました。

「里の鳥」であるコウノリが持続して暮らしていくには、その里に暮らす住民のふるさとへの熱い思いを基盤とした活動にかかっています。そこで、これまでコウノリ保護・野生復帰事業は行政・研究者に任せっぱなしだったことを反省し、行政—研究者—市民の三者が真に協働していこう、そのために私たち市民の力量を、全国ネットワークを構築して高めていこうと決意しました。そして、野生復帰の途上にあるコウノリを市民の立場で支えていくため、それぞれの地でコウノリが生息できる環境づくりに取り組んでいくことを確認し合いました。

こうして、本年8月30日、私たちは市民組織「日本コウノリの会」を結成しました。

本来は東アジアを自由に行き来する渡り鳥・コウノリは、今、徐々にそのおらかな本領を発揮しつつあります。彼らに寄り添い、支えていくには、私たちも閉塞的であってはなりません。様々な人々、機関、団体、企業と広く連携し、可能な限りコウノリが生息できる環境を多様に創っていきたいと考えています。

小規模でも、コウノリが採食できる環境を再生・創出できれば、そこは必然的に多様な生物が住

める空間となるでしょう。その空間が各地に増え、やがて点が線につながっていけば、少しずつ、人もコウノトリも共に生きていける社会に近づけると思っています。

困難な道ですが、「次代に生きる子どもや孫のために、今、創っておく」と思うことで、壁は突破できると信じています。

例えば、こんなことに取り組んでいきます。

- コウノトリの生態をより深く理解するために
 - まず、会員がコウノトリを正しく理解するために、学習活動を進めるとともに、コウノトリが飛来したら個体の動向を観察します。
 - 観察状況は、当該自治体やコウノトリの郷公園に報告し、かつ会員に発信して情報の共有化を図ります。
- コウノトリのことを広く知ってもらうために
 - コウノトリのこと、野生復帰の取り組みのことなどを広く知ってもらうよう、いろいろな方法で普及活動します。
 - 各地にコウノトリが飛来してきたら、できる範囲で観察され、当会もしくはコウノトリの郷公園、当該自治体に情報提供していただくよう、広く呼びかけます
 - 飛来情報は、当会で整理してHPで公表します。
- 全国各地で、コウノトリの生息環境づくりを進めます。
 - コウノトリの餌場になるよう、とくに休耕田や放棄田を活用して湿地にしていく活動を進めます。

10月末現在で、役員構成も決まり(不肖、私が代表となりました)、これから、全国の方々に野生復帰の輪に加わっていただくよう呼び掛けていきます。ぜひ、一緒にやりましょう。

日本コウノトリの会は、正会員(入会金10,000円、年会費2,000円)賛助会員(入会金なし、年会費:企業1口10,000円、個人1口1,000円)です。関心のある方は、事務局 ☎0796-20-8560 までご連絡ください。



あけび

小学校の低学年の頃である。秋、母親について山に栗ひろいに入ると、大きな「あけび」を見つけることがあった。幼い私には南国の果物のような印象があり、胸をどきどきさせたものである。むしゃむしゃと食べられるものではないが、不思議な魅力のある実である。今でもその頃のイメージが残り、植木鉢で育てているが、生命力が強く、水を好む植物で、他の株の花でないと受粉しにくい特性がある。見ているだけで子どもの頃が蘇るような気がする。

画・文 池上 晃



コウノトリの健康管理



兵庫県立コウノトリの郷公園 獣医師 松本 令以

今年の4月に兵庫県立コウノトリの郷公園に獣医師として着任しました松本です。3月までは、横浜市にある「よこはま動物園(愛称:ズーラシア)」や「野毛山動物園」で15年間、獣医師として働いてきましたが、日本の野生動物の保護・保全にかかわる仕事がしたいと思い、4月に兵庫県に移ってきました。



2016年10月23日戸島湿地まつりで講演される松本氏

動物園では、たくさんの動物種を飼育・展示しています。その多くが絶滅の危機に瀕しているのですが、これらの動物の展示、繁殖、調査研究などを行うためには飼育している動物が健康であることが前提となります。このため、飼育動物の健康を維持するのが動物園での獣医師の仕事になります。動物園在職中は哺乳類、鳥類から爬虫類まで様々な動物種の健康管理に携わってきました。このほか横浜市の動物園では、野生傷病鳥獣の救護活動も行っていました。これは神奈川県からの委託により行っているもので、神奈川県内で市民によって保護された野生傷病鳥獣を年間200~300個体、動物園に収容し、治療やリハビリをして野生に戻すという活動です。哺乳類ではホンダタヌキやアブラコウモリなど、鳥類ではスズメやツバメなど、都市環境の中で身近に生息している野生動物が多く持ち込まれてきました。

調査研究としては、鳥類の血液内に寄生する鳥マラリアの感染サイクル解明をテーマに大学等と共同研究を行っていました。鳥マラリアはペンギン類や猛禽類では死亡することもある鳥類の感染症で、蚊が病原体を媒介します。したがって、媒介動物である蚊の動物園内での生息状況を調べたり、園内に生息するスズメなどの野鳥を捕獲し、血液を採取して感染状況を調べたりしていました。また、ミゾゴイの保護や繁殖に向けた取り組みには特に力を入れていました。国内各地で保護されたミゾゴイを横浜市の動物園に集め、2015年に、国内動物園で初めて横浜市の動物園がミゾゴイの繁殖に成功しました。

また、博物館やNGOが行う特定外来生物カナダガンの生態系からの排除活動にも協力してきました。カナダガンは国内の野外では1985年に静岡県内で2羽が初めて確認されて以降、繁殖して生息範囲が山梨県や神奈川県などに広がり、約100羽にまで増えてしまっていました。標識を付けての行動範囲の調査や繁殖抑制のための卵の擬卵への交換、個体の捕獲、動物園への収容や展示などを行い、2015年には特定外来生物として初めて、環境省が国内根絶宣言を行いました。

さて、自己紹介はこれぐらいにして、コウノトリの健康管理についてご紹介したいと思います。コウノトリの郷公園では、飼育員13名と獣医師1名が働いており、協力してコウノトリの飼育管理と健康管理にあたっています。日常的な給餌や清掃、観察などは飼育員が行い、ケガや病気の診察、検査、治療などを獣医師が行います。

飼育コウノトリに何か異常が確認された場合には、飼育員からの報告を受け、まずはケージの外か

らコウノトリを観察します。詳しい診察をする場合には、コウノトリを捕獲する必要がありますが、捕獲してコウノトリを押さえる作業(これを保定といいます)は飼育員が行います。最初に飼育員1名が嘴を持って捕まえ、もう1名の飼育員が両方の翼を持ちます。この際、コウノトリを落ち着かせるために目かくしをかぶせます。

最初に健康管理の目安として体重をはかります。使うのは人間用の体重計です。診察は嘴の先から足の裏に至るまで、身体の隅々までチェックします。口の中、目の結膜の色、胸の筋肉の付き具合、換羽の状態、足の裏の傷の有無などです。

一般的な検査として、血液検査とレントゲン検査を行うことがあります。血液検査のための採血は、頸部にある静脈から行います。足や翼の静脈からも採血をすることができますが、途中で暴れてしまったり、終わった後に止血するまでに時間がかかったりします。血液検査は、遠心分離した血液を血液検査機にかけて肝機能や腎機能の値を調べたり、血液を1滴垂らしてプレパラートを作り、赤血球や白血球を顕微鏡で直接観察したりします。内臓疾患の有無や骨折の有無などはレントゲン写真を撮影して調べます。ヒトの医療の場合はこのような検査は臨床検査技師などが行いますが、コウノトリの郷公園では獣医師が行っています。

このほか、血液や羽毛を用いた性別判定のためのDNA検査や、卵の受精状況や発育状況の検査なども獣医師が行います。人間の場合、治療のための注射は、腕の血管や、臀部や肩の筋肉に行いますが、コウノトリの場合は、血管への注射は頸部や翼、脚の血管に、筋肉への注射は胸筋に行います。筋肉注射は筋肉がたくさんあるところに行うのですが、鳥の場合は、飛ぶために胸部の筋肉がとても発達していますので、この部分に筋肉注射をします。

麻酔は、ガス麻酔によって行います。嘴の長さに合わせて2ℓのペットボトルを改造して専用の麻酔用マスクを作成し、このマスクをとおして流れてきた麻酔ガスと酸素を吸わせて麻酔をかけます。だいたい5分から10分ぐらいで完全に眠りにつきます。コウノトリの郷公園には手術の機材もあり、今年になってからは、翼の骨折や足の怪我をしたコウノトリに対して麻酔をかけての手術を行いました。



体重測定



採血は頸部にある静脈から行う



手術のために麻酔をかける



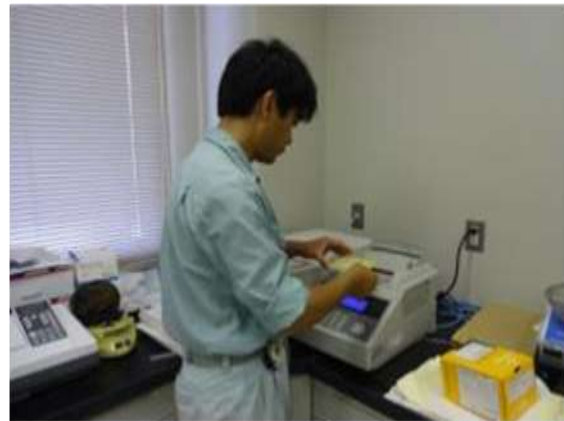
翼を骨折したコウノリの手術

コウノリの郷公園では西公開ケージでコウノリを展示しています。天井がなくフェンスで囲われているケージで展示していると、飛んで逃げていかないのかとよく質問を受けます。実は、片側の翼の初列風切と次列風切を途中で切り、飛んで外に出ていけないようにしています(切羽という方法です)。羽には血管も神経もありませんので、切っても出血はしませんし、痛みもありません。羽は基本的には毎年1回生え換わりますので、引き続き展示する場合はあらためて切羽し、展示を終了して繁殖等に用いる場合はそのままにしておくとも羽が生えてきてまた飛べるようになります。このほか、短い一定の期間だけ飛べなくするために、片側の翼にビニールバンドを装着する方法も、今年新しく行っています。

治療が長い期間にわたって必要となる場合には、コウノリを入院させる施設があります。検疫棟という建物の中に 7~10 羽のコウノリを入院させることができます。入院させたコウノリの給餌や清掃、観察は獣医師が行います。このほか、海外から新しくコウノリを入園させたり、他の動物園に出園させたりする場合にも、検疫棟にコウノリをいったん収容し、感染症の病原体を持っていないかどうかの検査を行います。この部屋は4m×4mほどの屋内室と4m×5mの屋外室からなっており、衰弱個体を暖める場合には屋内室のみに収容したり、リハビリとして多少の雨風や外気温などに慣らす場合には屋外室と屋内室を開放のまま広く使わせたりして、コウノリの体調などに合わせて飼育管理をすることができます。コンクリートでできた床には足を傷めないように人工芝を敷き、まわりのフェンスにはぶつかって怪我をしないよう、クッションとしてネットを取り付けるなどの工夫をしています。掃除作業の際には、コウノリを驚かせないように気を使います。また、嘴が折れてしまったコウノリは、自力で餌をつまんで食べるのが困難な場合があります。そのような場合は、バケツの中に砂を敷いたり、バケツの底部分を切り取って 3cm幅のネットを取り付け、さらにそれをもう一つのバケツに入れた特製の二重構造バケツを作製したりして、コウノリが自力で餌を食べやすいように工夫をしています。



コウノトリを入院させる検疫棟



DNA 検査で性別を調べる

コウノトリは、オウム病やサルモネラなどの感染症にかかることがあります。このような感染症が蔓延してしまうと、飼育しているコウノトリが大量死してしまうようなことにもつながりかねません。そこで、定期的に病原体の検査をしたり、日々の飼育管理の中で長靴や清掃道具を消毒したりして、感染症の発生を未然に防ぐために対策を取っています。

いろいろな診察や治療を行っても、残念ながら死亡してしまうこともあります。このような場合には、専用の解剖室でコウノトリを解剖し、死因を調べます。ケガや病気を治すために試行錯誤をして治療をしておきながら、死んだ瞬間から今度は、なぜ死んでしまったかを調べるために獣医師自らが解剖をすることになります。わざわざ解剖をするのには理由があります。それは、死んだ原因が解明できれば、その知見を、まだ生きている他のコウノトリの飼育管理や健康管理に役立てることができるからです。このような解剖も、野生動物や動物園動物を扱う獣医師の重要な仕事の一つです。

このように、野生復帰という華やかな事業の裏側で、コウノトリの郷公園では、飼育員や獣医師が協力してコウノトリの飼育管理と健康管理を行っています。コウノトリが健康であることで、コウノトリの展示や繁殖、教育普及、調査研究、そして野生復帰がうまくいくのです。また野外では、野生動物の健康、生態系の健康、ヒトの健康が密接につながっているという考え方が最近の獣医学には採り入れられてきています。この「保全医学」という学問分野を発展させていくのも、野生動物や動物園動物を扱う獣医師の大切な仕事なのです。コウノトリが健康に暮らし、生態系が健全に維持され、その中でヒトも安心して暮らしていけるような社会が日本中に広がっていくことを願っています。

松本氏の講演に聞き入る



※この原稿は、10月23日の戸島湿地まつりでの講演内容をまとめて頂いたものです。



コウノトリ湿地ネットの活動に期待すること 円山川菜の花の会 代表 岡本 昭治



毎年4月に開催しています当会主催の円山川清掃活動に、多数の方に参加いただいている事に対し、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

さて、余計な推察かも知れませんが、活動資金がたくさんあるとは思えないし、環境問題や自然保護に関する活動への評価は(少しずつ上がっているとは言え)、まだまだ十分なものではないと感じている中であって、湿地ネットの皆さんが日頃頑張っておられる姿を見せていただいていると頭が下がる思いです。



4月24日 円山川清掃活動

そのような状況においても、活動を継続し、より進めなければならない宿命があるのも事実だと思っています。私などが申し上げなくても、既に認識され行動開始されているものもあると思いますが、このような機会をいただきましたので、コウノトリ湿地ネットの活動に期待することを書かせていただきました。ご意見をいただければ有難いです。

① 地域やその分野におけるオピニオンリーダー的存在としての活動

リーダーとしての宿命であるかも知れませんが、自身の組織の充実だけではなく、関連する団体への配慮、助言を期待します。

② 市民としての立ち位置での活動

コウノトリ湿地ネットの立ち位置は「市民」であることを基本に、行政との連携や協働を望みたい。

③ 環境創造型農業をはじめとした地域産業との連携

コウノトリの野生復帰やそれに関連する施策だけでは、なかなか市民権は得られないように思います。農業や地域産業と積極的に連携することにより、市民権は格段に上がるのではないのでしょうか。

④ 生きものを愛する心のその先へ

活動の中では、生きものを愛する心を育むことが中心でしょうが、その先にあるそこに住む人々を愛する心を育むことが最終目標だと思っています。

そして、そのことを示す言葉や行動が、コウノトリが増えつつある状況のごとく、あちこちから聞こえてくる、そんな地域が作り出せれば最高だと考えます。



最後に、コウノトリ湿地ネットの活動がより充実・発展することをお祈りすると共に、目標の実現に向け、私達も共に歩んで行けるよう努力したいと思っています。

先日、全国水源の里シンポジウムで次の言葉に会う事が出来ました。「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。今後の活動に活かしていきたいと思っています。



暖かい提言、ありがとうございます。

湿地ネットは、PR パンプに書いておおり、「植物も、動物も、人間も、みんな命輝け!!」をモットーとしています。いろんな命に共感し実践する地域を目指し、これからも歩み続けます。

代表 佐竹 節夫

巣塔観察

2016年10月12日、目撃網参加者3名で豊岡市内の巣塔を観察した。目的は、最近巣台に草が生えているのが目立っているという指摘があり、草の生え具合を見るためだ。対象は現在コウノトリに使用されている9カ所の巣塔である。10月21日にも追加で1ヶ所の巣塔を観察した。



A、観察方法は巣塔近辺から目視、写真撮影。

B、草が生える原因は、巣台内に土が溜まっているのではないかと考えた。その結果、巣台の中に水が溜まる等の不具合が出て、繁殖活動に支障をきたすのではないかと考えた。

C、観察した10月12日、21日はすでに巣台内の草は枯れかけているものもあり、観察日をもう少し早い時期にした方がよかった。

D、市内10巣塔はそれぞれ巣材の様子等もかなり違いがあった。放鳥から11年経ち、巣塔の中には9年連続で使用されているものもある。そろそろ、各巣塔を点検する必要があるのではないかとと思う。

E、他に営巣している巣塔のうち、京丹後市の永留巣塔は、次の機会に観察予定。

写真：左上→下→右上→下（戸島・赤石・野上・福田・庄境・祥雲寺・百合地・伊豆・袴狭・山本）

コウノトリの放鳥から11年。コウノトリについて、あまりに知らないことが多いことに気付かされた11年だった。何と言ってもコウノトリの野生復帰事業は初めてのことなのだから。いつか本当に野生復帰が成功したと言える日まで見守り、ときには手助けをしながら共に歩んでいきたい。

（コウノトリ湿地ネット 宮村さち子）



ハチゴロウの戸島湿地便り(7月～10月編) 戸島湿地管理棟 森 薫



■戸島人工巣塔では

6月に巣立ちした2羽(J0125♂とJ0126♂)は、8月14日までは戸島湿地で過ごし、27日には、京丹後市久美浜町で確認されました。

J0126は奈良県生駒市三郷町まで飛来したものの、一日でまた久美浜へ戻り、現在も久美浜で過ごしています。(10月末現在)



2016年10月6日の戸島巣塔

戸島ペアは夏の間も、戸島周辺で過ごしていましたが、淡水湿地や電柱で過ごすことが多く、8月1日から19日までの間は巣には戻った記録がありません。その間、ミサゴが巣にとまり、獲物を狙い、魚を捕まえては巣で食べ、おこぼれはカラスが食べていました。巣にはそんな中、7月の終わりから草が伸び始めてきました。10月7日にJ0391が帰巣してからは巣の草はほとんどなくなりましたが、巣の中はどんなになっているのでしょうか。

昨年は7月18日にマウンティングをしました。(J0030などの飛来が度重なっていました)今年は静かな環境(ほかのコウノリの飛来がない)のためか、10月21日と2か月も違いがあります。繁殖期以外のマウンティングは、ほかのコウノリの飛来と関係があるように思います。マウンティングをする回数が多いのも、縄張り意識の表れでもあるのでしょうか。目視での観察もしっかりしていきたいと思っています。

■湿地作業には

兵庫県損害保険代理業協会、奈良学園、龍谷大学農学部(インターンシップ)、豊岡総合高校インターアクトクラブ、近大付属豊岡中学校、城崎小学校3年生の皆さんが作業に来てくださいました。企業の方は団結力で、お互いを思いやって作業をされていました。小学生も、小さな手に鎌を持ち、「みんなで汗かいて、みんなで頑張って、みんなで草を刈れてよかった」と素敵な言葉が聞けました。

今年度も、市より予算をつけていただき、宮村会員とシルバー人材センターの方で湿地の草刈り・搬出をしていただきました。宮村会員考案のボートを使い草の搬出する術は、定着し効率よく作業が進んでいます。この2年間で湿地の水は随分きれいになりました。湿地に作られた生きものの隠れ家には、サギやカワセミがとまり餌を効率よく捕食している姿が見られます。



- ・8月5日 戸島湿地汽水域のカワセミ・
- ・9月17日 豊岡総合高校インターアクトクラブ・
- ・10月19日 城崎小3年生

■『ハチゴロウの戸島湿地まつり』を開催しました。

バザーなど地域の方の協力を得て、今年も10月23日(日)に、まつりを開くことができました。『学ぶ・食す・交流する』をテーマに、お越しいただく方に楽しんでいただきたい、交流の場にしたいと数か月前から準備を進めてきました。

今年の『学ぶ』は、コウノトリ郷公園の松本獣医師に『コウノトリの健康管理』と題して講演をしていただき、獣医師として野生動物の日常的な治療の様子や、病気の予防について、分かりやすく説明していただきました。

『食す』は、恒例の戸島・田結地区のバザーに加え、今年は『KAKEHASI』チーム(城崎町内川地区で地域資源を生かして地域活性化を目指している団体)・燻製(友田会員)・ペレットピザ・焼き芋(川中建築ペレット製造部)の協力もあり賑やかにしていただきました。

『交流する』では、ワークホーム大地の『さをり織り』や、(有)晃の『花鉢』の出店により、まつりに彩を添えていただき、お客さんからも好評でした。今年から『交流する』機会を増やしたいと、但馬野鳥の会の皆さんと、野鳥の観察をしながら湿地を散策していただきました。探鳥会後の『鳥合わせ』を皆さん楽しそうにされているのが印象的でした。また、久美浜町に飛来しているコウノトリの様子を皆さんに見ていただきたいと、京丹後市の会員(野村さん、美王さん)が撮られた写真を、管理棟内に展示していただきました。「こんなようけ、久美浜におるんですか。ええですなあ」と大勢の方が感心して見ておられました。

まつり最後の『餅まき』では、戸島湿地にCSR活動として来ていただいている中から兵庫県損害保険代理業協会、あおいほけん、(株)川嶋建設の代表の方に餅をまいていただきました。来年のまつりには、ご家族で来ていただけそうで嬉しいです。

ハチゴロウの戸島湿地にミズアオイの花が繁茂した8年前。この花を多くの方に見てもらいたい、とにかくここへ来てもらいたいと『ミズアオイまつり』から始めた『まつり』です。今では、毎年この日に来てくださる方、お顔なじみの方など、皆さんとの会話が私の元気の源となっています。

あいにくのお天気の中、お越しいただいた方々本当にありがとうございました。



上段：お魚救出作戦のこどもたち・救出した魚の放流・野鳥観察へ出発
下段：戸島区・田結区のバザー・燻製作業



竹野町に飛来して来たコウノトリ(J0102、J0106)

これまで何度となく訪れているコウノトリですが、割と早く帰って行くのであまり気に留める事ありませんでしたが、今回は8月28日～9月23日までの約1ヶ月近くの滞在でした。

その間は、子供園の園児や特養老人ホームの皆さん、犬の散歩中の人、ウォーキングの人々、通勤途中の方々、稲刈りの家族、小学生いや中学生、と幅広くコウノトリと対面し、大きなコウノトリにびっくりしていました。

この町にもコウノトリが住んで欲しいと、口々に話しをされていました。

「コーちゃん」と手を振る子供やお年寄りなど、とても人気者で「こっちこい！こっちこい」と手招きする方、皆さん誰もが初めてですと、間近に見るコウノトリを楽しく静かに見守って下さいました。

仲良しの2羽ですが、時には別行動をして喧嘩したのかしらと心配しながら、学校帰りの中学生から「今日罅入りしてたよー」と聞くと安心し、子を思う親の気持ちで過ごした1ヶ月でした。

いつの日か竹野町から巣立って行くコウノトリが見られたら嬉しいです。その日が来るのを楽しみにしています。

追伸！：写真も沢山撮りましたが、表情がとても可愛いですね！ピンボケが多いのですが、消去できません！！

竹野町在住 古林京子



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿(新規入会)



(大阪府豊能郡)福山香織 (豊岡市)宮垣伊久代 福元達朗

(2016年7月16日～10月31日)

ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。



編集後記



昭和17年城崎の秋祭り、『だんじり』にしがみついている父の写真がある。『だんじり』が好きでたまらなかったのだろう・・・好きすぎて、拘りがあり『へんこ』を起こしていたことも多かったなあ。年を重ねると引退しなければならず、数年間は祭りの日には友人と旅にでていた。今年の祭りは晴天。「だんじり太鼓を、天まで届けておくれ」と、祈った。(森)

秋も深まり、とうとうストーブを出した。ついこの間まで、暑くて身の置き所がなかったのに。季節がきちんと巡ってくるのが不思議に感じられる。ストーブで一番喜んでいるのが我が家のネコたち。古株のネコはさっそくストーブの上を自分の定位置に決めたようだ。(宮村)